

第35回夏期福音特別集会（1）

言霊なるキリスト——ヨハネ伝第1章1～18節

1988年8月19日

小池辰雄

世界的な詩 言霊 本当の光 聖名の中へと信入 最初に行為があつた 恵信一如 在らしめ
られて在る 詩「受肉のキリスト」

【ヨハネ1:1～18】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2 この言は太初に神とともにあり、3 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。5 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7 この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり。16 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

●世界的な詩

この7月の始め、私は著作集第十巻の初校をやっていました。この第十巻は多分秋に出ます。また私は、この辰年から次の辰年——次の辰年は2000年です——この12年間に世界的な詩を書きます。そのために、時間の非常に切迫して来つつあることを、しみじみ



と感じました。これは是非とも書き上げなければならぬ。本当に世界的です。このためには、私は来年から打ち込まなければならぬ。

それで、この夏の集会は今回限りで決められました。今回が最後であると、これは独りで上からそう決められた。誰にも相談しません。

私は本当にみ言に従って祈り込んだ。そうしたら、私の中に変化が起きた。内側から変貌した。私は非常に楽になった。未だかつて知らない境地にはいりました。そうしたら、本当にすべるように私はこの準備ができました。各集会毎に新しい讃美歌を歌います。

そういう最後の集会でありますので、皆さん、どうぞ始めから終わりに到るまで、私と一緒に、本当にみ霊、み言の中に入ってください。サタンが何を言おうと一向差支えありません。キリストが勝つていらつしやいます。主さま、有り難うございました。

アウグスチヌスの晩年、アッシジのフランシス、ザビエル、ああいう連中の霊の世界が非常に近くなりました。ルッターやカルビンではない。もうロマ書7章のパウロの叫び苦しきは抜けました。ロマ書8章だけになりました。私の中にはもはや矛盾はありません。私は、ダンテでもゲーテでもありません、東洋の小池です。

●言霊

それでは、ヨハネ福音書第1章1節、

「はじめのことば
太初に言あり、

「言」はギリシヤ語で

「ロゴス」(Logos)

と書いてあります。ロゴスは、紀元前30年から20年頃のアレキサンドリアの、ユダヤ的ギリシヤ的両方の学問宗教を知っている哲学者フィローというのが、旧約の真理とプラトン、アリストテレス——プロタゴラスから始まっていますけれども——その真理を統一しようという、そういう気持で哲学していた男です。それがこのロゴスという言葉を使った。そして、

「これは神的存在だ」

とまで言いました。これをヨハネが、ヨハネの立場から、この言葉を援用したわけです。ヘブライ語でいうと、「言葉」というのは「ダーバル」という字です。ロゴスというギリシア語は、本当は言葉という意味ではない。むしろ理性です。非常に知的な理性的な方面からの悟りの意味を持った言葉です。しかし、ヨハネが使っている時は、そのフィローの意味を福音的にしたので、同じロゴスという言葉でも内容は違うわけです。私は前に

「はじめに霊言あり」

と自分で訳しました。そうしたら、明治の初年に、

「はじめに霊言あり」



という訳があつたので、ああ面白いな、気持ちが合ったなあと思った。今回は霊言でもいいけれども、ひっくり返して言霊と私は訳しました。キリストは

「神は霊なり」

とおっしゃいました。もちろん、この「霊」は神の霊のことです。

「わが言は霊なり、生命なり」

と仰いました。「言が霊であり生命である」とキリスト自身がおっしゃった。ですから、このロゴスは霊言か言霊か、とにかくこの二つの構造において訳するのが本当だと思いました。言霊という言葉は、もう日本の初めの、古いところから有ります。霊と言とは分けてはダメなんです。よく、霊的な人が熱心に祈ります。神のみ言が、聖書のみ言が裏付けられていないところの霊的な祈りは危ない。そういう意味で、この言・霊は不可離の関係にある。十字架と聖霊それにこの聖言。もうひとつ有ります。行為。この四つは、ちょうど十字架の四辺のように離すことができない。

「ロゴス」というと、ギリシヤ語では他に、「パトス」(Pathos)と「エトス」(Ethos)という言葉があります。「ロゴス」は知的なもの、義の世界。「パトス」は情の世界。「エトス」は意識的なもの。知情意というのがちょうどこれに当たるわけです。

それで、「言」はロゴスですけれども、ヨハネのこのロゴスは、このパトスとエトスとをみんな含んでいる。そういう、深いロゴスです。深い聖言です。

「はじめに言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」

「はじめに言霊があつた。言霊は神とともにあつた。言霊は神であつた」という。この素晴らしい三句。

「言霊があつた」

「あつた」「エーン」という字は不定過去で過去から現在にわたって今もそうであるということ。これは存在ですから、在ること。少し難しい言葉を使いますと、これは「エクスステンチア」(existentia)、「実存」「存在」です。

「それは神であつた」

と。神というのは神性、神の性^{さが}を持ったもの。これは本質を言っているわけです。言霊の本質は神的なものであると。これはラテン語でいうと「エッセンチア」(essentia)になる。だから、「エクスステンチア」と「エッセンチア」と、それがここに言われている。

「神とともにあつた」

という、この「ともに」は、「プロス」(pros)というギリシヤ語で、「に対して」という意味です。神に向かって、あい対してということ。私はあなた方にあい対している。これがプロスということ。

「言が神に対してあつた」

そうすると、これは単なる言でなかった。話しかけである。話しかけに対しては答えが



ある。ドイツ語でいうと「ヴォルト」(Vorte)に対しては「アントヴォルト」(Antwort)がある。これが「対してある」ということ。本当の会話があるということ。キリストは神さまと本当の会話がありました。議論ではない。単なる話し合いでもない。語りかけ、呼びかけです。そういう動的な言葉である。エックハルトが

「神という字は名詞ではない、動詞だ」

と言いました。さすがにエックハルトだ。それで、私はそのエックハルトの言葉を

「神する」

と訳した。「神は神したもう」と。

それで、最初のその三つの言葉、もうこれで完璧なんです。そして、その言霊は神さまばかりではなくて、私たちに話しかける。これがキリストです。

● 本当の光

³ 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

断言です。聖書の言葉は本当に素晴らしい。圧倒される。

之に生命あり、この生命は人の光なり。

「ありき」も「あり」でいい。ヨハネ伝1章1節から18節は聖書の最も凄い所の一つです。これを本当に自分で黙読身読し、瞑想し祈り、その中にはいったら、あなた方は凄いことになる。「生命」はもちろん永遠の生命です。「ゾーエー」というのは死なない生命のことで。プシフェーではない。私はあなた方とこうやって聖書を食らっているのが本当に嬉しい。もう、ここは天国です。

⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「悟らざりき」は、あるいは「勝たなかった」と訳します。光が本当に暗黒に照ると暗きを光に変えてしまう。

私は内側から変貌した。こんな体験は初めてです。最後の峠を乗り切った。あとは、山頂に向かつて歩いて行くだけ。もう谷はありません。こんなにも、楽しく明るい世界かと。何だか、聖書のみ言が一段と光って来た。

「光」とはこういう字です。太陽から七つの線が発している。虹のようです。七彩の虹。キリストの十字架・聖霊の光は虹のごとし。

⁶ 神より遣された人いであり、その名をヨハネという。⁷ この人は証のために来たり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸

彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

「光につきて」ですけれども、まさに「つきて」というようなところで、

「洗礼のヨハネは素晴らしい、これは預言者の最後の者だ。けれども、天国の者は



ヨハネよりも大きい」

とキリストは言われた。しかし、キリストの前に殉道の死を遂げたヨハネの存在は、決して忘れることができない。パウロの前のステパノのごとく。

生命だとか光だとか、そういう言葉がちよつと抽象的に見えても、非常に具体的な言葉です。聖書の言葉は絶対に抽象ではない。全部、具体性をもっている。形容詞はない。全部、現在直説法です。それが本当の永遠の世界なのです。

⁹ もろもろの人をてらす^{まじし}真の光ありて、世にきたれり。

この「真」^{まこと}という言葉が時々使つてある。キリストも

「我は真^{まこと}の葡萄^きの樹」

と言われた。日本語でいうと、「本当の」ということです。よくこの頃、若い人たちがすぐ「本当?」なんて聞くけど、あんな安っぽい本当ではない。これは「本当、本もの」ということ。「真理」という言葉がよく出て来ますけども、単なる理でない。あの「アレタイア」というギリシヤ語を「真理」と訳すのは私はあまり好きではない。私は「本もの」と訳す。本もので結構だ。「我は真理なり」は

「我は本ものなり」

ということです。キリストは

「我は本ものなり、生命なり、道なり」

とおっしゃる。聖書の御言は、読むことが直ちに祈りであり、直ちに現実であり、直ちに力である。「後で祈禱会しましょう」なんて本当は要らない。もちろん、この光は太陽の光以上の霊的な光です。パウロが復活のキリストの霊光に撃たれた。

●聖名の中へと信入

¹⁰ 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹ かれは

己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

彼はユダヤに來たのに、選民ユダヤ民族はこれを受けない。今でも受けない。「キリストは預言者の一人である。パウロは間違つた。キリストを信じて、救い主としたのはまちがつた」と、あいかわらず思っている。

「兄弟たちに呪われても、私はこの同胞の救いを求めているんだ」

と、パウロはロマ書9章で叫んでいる。「アナテマ」という。キリストは今でも十字架の上で、ユダヤ人からは「アナテマ」「呪い」にされている。呪う人は自分がだめになるだけのはなしです。

ユダヤ人はキリストを受けない。この「受ける」という字は「パラランボノー」という字で、花嫁を花婿が迎えて受けとるような意味の、そういう時にも使う言葉です。

¹² されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあた



え給えり。

12節は素晴らしい。

「聖名を信ず」

とは直訳すると、

「聖名の中へと信入する」

ということ。信じ入る。み名の中へと信じ入る。聖名は実名ですから。私の祈りは簡単だ。

「主さま！」

だけだ。

「主さま！ アーメン！」

でおしまいだ。これが聖名です。「主さま！」と言って、全存在がキリストの中に取り入れられるような叫びが、これが聖名を本当に呼んでいることです。こちら側でただ呼んでるのではない。呼び入るんです。

13 斯る人は血脈^{ちすじ}によらず、肉の欲^{ねがい}によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。

キリストの聖名を受けとれば、本当にその通りです。生まれつきの我々は、キリストを受けとることができない。一遍キリストの前に平伏すまでは。人間的な熱心でいくら呼んだってダメなんだ。一遍この聖書の現実に、聖言の前に降参するまではダメだ。意味ではない。

「参りました！」

と言って、全存在をそこに平伏すと、今度はキリストに叫びかけることができる。

●最初に行為があった

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、

この「宿る」という字は「幕屋を張る」という字です

「言霊は肉と成りて我らの中に幕屋を張り給えり」

パウロは私たちの身体そのものを「幕屋」と言いました。それから、二、三人集まって、主さまをまん中に行っている事態が幕屋（三角垂体の構造）です。十字架の柱が立っている。底面のa、b、cの各人は皆、十字架と縦の関係が立っている。この縦の関係がなかったら、このa、b、cはダメなんです。いわゆる三角関係になる。それぞれ、主に在って比較を絶したものが、このa、b、cです。人格は比較してはいかん。一対一の関係です。そうすると、この三角は円現して円になってしまふ。丸くなってしまう。

ゲーテが『ファウスト』の中で、

Im Anfang war das Wort.

「最初に言があった」

という句を、その頃のキリスト教がいわゆる言葉の宗教になっていてダメだ、いわゆる教



会の信仰が空念仏だと、ゲエテはそれを嘆いて、

「最初に思念^{おもひ}(Sinn)があつた」

と訳した。まだうまくない。

「最初に力(Kraft)があつた」

だいいいいなあ、でもまだちよつと、と言って、この力が現るものは行為(Tat)である。

Im Anfang war die Tat.

「最初に行為があつた」

と訳して、やつと気がおさまつたと、ファウストをして言わしめている。もちろんゲエテの気持です。

Tat um Tat

「すべては行為である」

というような言葉もファウストの中に出てくる。アブラハムも、「ウルから、ハランから出て来い」と言われて、「はい」と言って従つたのは行為なんです。これが信仰です。イサクを捧げるのも行為です。出エジプトの恵みをしたのも、モーセを通して成したのも、神の行為なんです。それから、モーセに十戒が来た。十戒という言葉が来た。恵みの行為の方が先だった。

「太初^{はじめ}に行為あり」

なんです。天地創造という行為があつた。そして、

「これをよしと言ひ給えり」

と。「ああ結構だ」とおっしゃつた。後に言葉が来ている。マルチン・ルッターが、

「信仰プラス行為ではないぞ、信仰だけだ」

と言つた。これは、ユダヤ教に対して、パウロがガラテヤ書でそのことをはっきり言っている。

「信仰のみだ。信仰によって義とされる」

と。「よしとされる」という。それはそれ自身、非常な凄い真理です。信仰プラス行為なんというのではない。そんなことでもってやって、「信ずるは易しいが行為は難しい」なんていうのは、「言うは易く行ふは難し」なんてのと同じことだ。

「そういう二段構えをいつまでやってもダメだ。信仰だけだよ」

と。「信仰だけだよ」と言つたパウロもルッターも、最も行為の人だつたではないですか。これが本当に、「信即行」の世界なんです。どんなに行為が破れていてもいい。即の世界にこなければ、いいですか。我々はどうせ破れ器だよ。しかし、これが本ものであればいい。二段構えではない。一如の世界です。「言行一如」です。十字架が土台です。聖霊が一切を包んでくださる。

「アブラハムより我は先にありしなり」



という言葉霊的存在であつたキリスト。キリストはマリアをとおして現れた。これが

「肉となつた」

ということ。我々と同じ、食べたり飲んだり寝たり、笑ったり泣いたり、という人になつた。

「我々と同じ弱さを持つて思いやることができるのはそういうわけだ」

と、ヘブル書の4章に書いてある。キリストは本当にどん底から私たちを思いやつてくださる。

この頃日本には思いやりが無くなつた。この頃の子供は自分のことばかり考えて、人に迷惑をかけても一向に平気な、こうすれば人に迷惑になるなんて思わない。子供が悪いのではない。教育が悪い。親、先生。特に母親が大事だ、教育は。責任はこっち側にある。我々の側にある。コマーシャルイズムにすっかりひつかき回されている。なんですか、このマンガ文明は。ドイツ人が言つた、「一体、日本人はどういうんだ、こんなものばかり読んでいて」と。読んでいるのではない、あれは見てるんだ。作文を書かせるところに文章も書けない。漢字は知らない。漢字は世界最高の文字です。こんな素晴らしい文字をいい加減にしている。

●恵信一如

我々の間に幕屋を張られた。我々の間に一緒に住んでくださる。宿つてくださる。それは私たちを救わんがためです。これがいわゆる「受肉」という。雲の上の人ではない。一緒にペテロやヤコブやヨハネとご飯を食べたり、非常に仲良く暮らしてください。故郷の人には入れられないで、ガラヤに來てしまった。ナザレから出てしまった。

「預言者は故郷に入れられず」

という。いわゆる肉的に近い人が一番難しい。「家の者は敵だ」なんてキリストはあんなことまでおつしやつた。

我らその栄光を見たり、実に父の独子ひとりごの栄光にして恩恵めぐみと真理まことにて満てり。

栄光というのは、父なる神を体現した、身体で現じた、その姿が栄光です。

15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、まさ

我より前さきにありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』16 我らは皆

その充ち満ちたる中より受けて、恩恵めぐみに恩恵を加えらる。

「充ち満ちたる」「プレローマ」です。この「充ち満ちたる」という言葉はよくパウロの書簡にも出て来ます。

「恩恵に恩恵を加えらる」

「カリン・アンティ・カリトス」

とは素晴らしい言葉です。「加えらる」という言葉はない、ただ「恵みに恵みを」と書いてある。ドイツ語でいうと、

「グナーデ・ウム・グナーデ」(Gnade um Gnade)



という。恵みに圧倒される。実はキリスト自身が恩恵なんです。

「恵信一如」

という。恵みを受けるということが信ずるということ。この「信」という字は「受」といつてもいいくらいです。これが一如です。

「恵みにより、信仰によりて救われたり」

と。恵みがもちろん先です、上から来るのが。キリストが我々の間に幕屋を張ったという、この事実が恵みの第一歩である。そして、彼が地上でもって、この福音書が伝えているような聖言を伝え、かたづけしから人を助けてしまった、救ってしまった。死人まで甦らせてしまった。もの凄い「言行一如」の世界です。これが恩恵の現象体です。キリスト自身が恵みそのものです。

●在らしめられて在る

17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

律法は、実はユダヤ人はとりそこなつた。律法は本当は隠れたる福音だったんです。

「汝殺すなかれ」

ではない。

「お前は殺人はしない」

という言葉です。あの本当の内側の意味は

「私が神だから、お前は殺人なんかできない」

という言葉です。「ロー」という否定詞は「アル」という「すべからず」ではなくて、「そうではない」という断定的な否定詞です。少し婉曲に訳すと、

「汝は殺人せじ」

ということ。「せじ」でもいいが、本当は「しない」でいい。

「我はエホバなり」

と後ろの方にちゃんと書いてある。隠れたる福音なんです。その隠れた福音を、神さまの我々を信じてくださるその恵の言葉、気持を本式に受けとって、山上で語ったのが、キリストの「山上の大告白」で、モーセの律法をはるかに越えたところの言葉です。ところが、ユダヤ人は「モーセ、モーセ」なんだ。

18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

素晴らしい言葉です。私は大好きな言葉です。神の懷にいたキリストだけがこれを現した。私たちはキリストの懷に入って、本当にキリストを体現したい。

マルチン・ブーバーは「はじめに言あり」を

「はじめに關係あり」



なんて言っている。関わり、関係がある。上からの関係づけ。それはひとつのうがった取り方ではありません。

「在り」という存在。本当に

「ザイン」(Sein)

しているという。これはハイデッガーが言っている。我々が存在しているのは、

「ここに投ぜられてある」

「ダーザイン」(Dasein)

という。ドイツ語でいうと、ザインがなければダーザインはない。「我在り」とは言えない。デカルトの「我思う故に我在り」なんてとんでもない。あれは観念なんだ。

「神いましたもう、キリスト在りたもう。故に我は在る」

ということ。むしろ

「在らしめられて在る」

ということです。だから、本当に在らしめられて在ることを、自己を投げ出しているその事態を

「ゲラッセンハイト」(Gelassenheit)

と言った。ゲラッセンハイトという言葉は、仏教的な言葉でいうと放^{ほう}下^げです。全部、自分を任せてしまう。我々は、本当にキリストに自分を任せてしまっているが、キリストという存在に対して本当に任せていれば、これが本当のダーザインになる。本当の在らしめられている在り方になる。私たちは、この言霊によって在らしめられて在る。言・霊に在らしめられて在る。

それで、この聖言と聖霊は絶対に離してはいけないということ。聖書が土台になってないような祈りはしないことです。霊的であると、サタンが来ます。しかし、恐いことは一つもない。キリストに連なつてください。こちら側は弱虫で一向差し支えない。

「我れ弱きときに強し」

と、パウロが言った、その通り。コリント後書12章です。パウロを読むと、こんな人がいるかと思うくらい素晴らしい。素晴らしいというのは、その福音を受けとっているところの、内容の有機体的な構造の素晴らしさです。キリストを除いては、パウロは第一人者だ。選びの器だ。これがキリストに反抗していた張本人ですから。復活のキリストに、

「なぜ、私を迫害するか!」

と、人間的熱心でやっていたから、ひっくり返された。キリストの熱心が、神の熱心が、聖言の権威が来てないと、そういうことになる。

●詩「受肉のキリスト」

パウロを読めばパウロとなり、ヨハネを読めばヨハネとなり、ペテロを読めばペテロと



なり、ヤコブを読めばヤコブとなる。自由自在になる。

未だ表現できなかったことを、私はこの詩で表現しなければならない。もう、人生の最後の峠を乗り越えたから、私は

「本当に主さまありがとうございました」

の他なにもない。後は嶮路を登るだけ。ダンテを塞いでいた、あの三つの動物、あんなものはもう怖くなくなった。ダンテは地獄を通らなければならなかったけれども、私はキリストの聖霊聖言にすっかり変貌させられたから、新しい次元に入ったから、何にも恐いものはない。不思議でしょうがない。私はひとつも力んでいません。力んで、できることではないですから。私はこの境地で皆さんとこの集会ができたことを本当に感謝しています。それで、一つ新しい讃美歌をご紹介します。ここに、私は「天言」と書きました。私の号は全部「天」が上に付いているが、これは、新しい光を発していますから、間違えないでください。キリストの光ですから。

A51 受肉のキリスト（1988年8月5日作 歌調・讃美歌538 「過ぎゆくこの世」）

1. 永遠の太初に 言霊ありき
言霊 神と 共に在りけり
2. 言霊の性 神性にてあれば
よろづのものを 成り出でしめぬ
3. 言霊 生命 生命は光
4. 光は闇に まことの光体 うち勝ちたるぞ
世に現はれぬ
5. 言霊 肉と 成りて幕屋を
われらの中に 張りて宿りぬ
6. 彼れの聖名をば 信ずる者は
神の子たるの めぐみを受くる
7. かくてみ神の 独子イエスは
恩恵と真法 体現したり
8. 父なる神の みふところなる
キリストこそは 神の顕現！

天言記之

